

あわいものから見る世界 ——魚とフェミニズムの交差するところ

Intersectional Ecologies:
Fish, Feminism, and Life in the In-Between

福永真弓 (東京大学)

Mayumi Fukunaga (University of Tokyo)

Abstract

What forms of life do we co-inhabit the world with, and how are these relations reshaping what it means to be human? In the epoch of the Anthropocene, such questions are unlikely to bear fruit without attention to the specific, embodied presence of non-human life. This paper draws on the concept of “reproductive labor” (Waldby & Cooper, 2010) as an analytical thread to explore the forms of domestication experienced by the fish that are made into salmon. In doing so, it sketches a vision of a society in which life itself—down to cells and microbes—is not only subjected to processes of domestication, but also informationalized and rendered infrastructural through systems such as DNA sequencing and biochemical engineering. This analytical thread is composed of two key issues long debated in feminist thought on female sexuality and embodiment: the objectification of women and the expansion of being female. The bodies of non-human beings that emerge from human food practices offer us critical insights into how we ourselves might live—as beings that are at once natural and artificial, organic and engineered.

キーワード

サーモン、生命のインフラ化、生殖労働、雌性の拡大、あわいもの

1 生命がインフラ化する世界

(1) 多様化のなかにある食べること

わたしたちはいかに食べるのか。現代社会においてこの問いは簡単ではない。どうしようもなく食べることが苦痛である人も、おいしく食べることができなければ人生ではない、と考えている人も、誰しも食べることから逃れられない。今のところ、私たちの身体は植物のように光合成できないし、菌類のようにうまく分解に特化することもできない。ゆえに、私たちは食べなければならない。

社会学者のゲオルク・ジンメルは、食べるということは、自然主義的な側面があるからこそ社会化をもたらしてきたのだと指摘する (Simmel 1910=2014:156-8)。人間は食べねばならない。それは誰しにも共通することで、その必要性を互いに認識するのめたやすい。ゆえに、食べることには社会で共有される意味が生まれ、記憶が蓄積され、秩序がつくれ、多くの規範が張りめぐらされる。私たちはそこに状況づけられており、そのような自分として食べるということを「する」。嗜好も食事作法も、私たちがどのような秩序や規範の中にあるのか、どのような集団の中に生きているのかを暗黙の内に語ってしまうから、食べることは同時に、私たちの存在そのものを露わにする行為でもある。

だからこそ、食べることは簡単ではない。食べ物を商品として手に入れる現代社会においては、食べることは消費することであり、プレイヤーとして自己責任のもと終わりなきアイデンティティを形成するための、他者からの承認と評価をつくるための行為でもある。こうした行為の中で食べられるものは、意味を表す記号として消費される (cf. Baudrillard 1968=2008)。しかし同時に、モノとして差異や分類を生む力を持ち (cf. Douglas and Isherwood 2001)、行為と意味の生成を同時におこなう場ともなる (Miller 1987)。資本主義社会では欲望の創出と差異化が市場を動かしながら商品を増やすが、消費者はその商品の多様さに助けられ、「わたし」を維持するために行為と意味の生成を行う。そして再び欲望する。商品の手数のみならず、経験することそのもの、食べることそのものの差異化と多様化も求められながら、食は商品として多様化し続けることを求められているのだ。

(2) インフラ化される生命たち

商品がひたすら差異を求めて多様化する一方で、商品の履歴はブラックボックスの中にとどめられ、背景にある生態系、労働、ロジスティックス、グローバルサプライチェーンについても、その複雑性や暴力性ごと (Cowen 2014; Sassen 2014) 不可視化される。ストーリー化され、商品を魅力的にみせて差異化させるテキストとしての背景ではな

いものは、きれいにみえなくなる。カール・マルクスが商品の物神崇拜の問題として提起したように⁽¹⁾、交換できる商品同士の関係性のみが表面化し、背景にある人間のあいだ、人間と生態系のあいだ、それらのあいだを結び生み出す労働、労働により生み出される価値については、あたかもはじめからなかったかのように捨象されてしまうのだ。

文化人類学者のメアリ・ダグラスは、集団がつくる境界の外側にあるもの、未知なもの、無秩序なもの、そして集団の内側に取り込むことができないものが不浄なもの、汚穢なものとしてきたものなのだと読み解く (Douglas 2002=2008)。こうして排除するということは、積極的な環境形成のためになされる思考と行為であり、消極的なものではない。清浄なものや秩序だったものを私たちの社会の内側に収めるために、あえてある対象を汚穢化し、そのようなものと定義し、不可視化する。食の後ろにあって、あえて見えなくされてきたものは、食材にするために殺し、解体処理し、商品として見栄え良く調える過程ごと、汚穢化され、見えなくなり続けている。生命をつくり食べるために調えるまでをインフラ化して日常の認識の外におく。インフラとは問題がない限り、見えないままに私たちを支えるものの集合体であり、私たちがそれらに無関心である時、インフラは正常に機能している。食の後景がインフラ化されることで、私たちは日々の安寧と安心をえる。商品を選ぶときには、重苦しい履歴は見えない方がよい。

安寧の商品世界が商品の多様さと数を増やしていく傍らで、見えなくなった生態系は、コロンブス交換以降すすむ均質化と単純化のもと、姿を変えてきた (Mann 2011=2013)。16 世紀以降の大規模モノカルチャー生産様式 (プランテーション) は、奴隷制度や植民地主義と結びつきながら、労働、自然、資本を支配・従属的關係の中に組み込んできた。そして、グローバル経済の進展と共に、安定した画一的な品質の商品にするため、素材そのものの均質性を求め、省力と効率性を求めて生産地となる農場の生態系をも除草や肥料で合理的に単純化してきたのだ。科学技術史家のダナ・ハラウェイや文化人類学者のアナ・ツインは、プランテーションの世界的拡大こそが、現在のグローバル経済と環境危機を生み出した歴史的転換点であると捉え、プランテーション新世 (plantationocene) という批判的分析枠組みの重要性を説く (Haraway 2015; Haraway and Tsing 2019)。それは、プランテーションにより再編され続けてきた生命圏のなかで、人間が生み出してきたものも含め、人間以外のものたちと新たに生きる場を探索しようとする呼びかけでもある。

家畜化された動植物たちは野生のものたちを質量として上回り、生命科学の進展と共に急速に細胞や微生物を対象とする家畜化も進展しつつある。立て続けに各国で食品としての認可が下り始めた細胞培養肉や、特定の微生物に遺伝子を組み込んで蛋白質

や脂質を生成する精密発酵などがそうだ。成分や化学的反応に還元され、再編される生命圏の姿が現れつつある中、私たちはいかなるものと生きようとしながら、いかなる人間となろうとしているのか。食べものをつくり、食らうという私たちの活動は、多様化と還元主義という二つの矛盾する運動のあいだで、人間存在の基盤だった地球をその手で変容させ、依存できる基盤なきまま、人間らしさを探求するという活動になっている。

2 雌性という力点：交差する魚とフェミニズム

(1) 変容する生命圏を生きるサーモンたち

私たちはいかなるものと生き、いかなる人間となろうとしているのか。この問いを考えると、具体的な人間以外の生きものなくしては、その探索は実を結びにくいだろう。ここからは、具体的な商品とそれをつくる原材料としての生きものを対象に、この問いを探ってみたい。とりあげるのはサーモンである。

サケ・マス類はこの50年間で急速に家畜化が進展し、大規模な生産体制が整えられ、またたく間に国際的な食材となった。サーモンは養殖されたサケ・マス類を指す商品カテゴリ名だが、特に生食が可能な大型なものを指す。ニジマス（トラウトサーモンと呼ばれる）、ギンザケ、アトランティックサーモン、キングサーモン（マスノスケ）がこのカテゴリで活躍するサケ・マス類だが、とりわけ日本では、近縁種とのハイブリッドや新たな系統群の開発により差異化が進められ、ご当地サーモンと呼ばれる養殖サケ・マス類の品種は全国で100を超える。

鮮やかな色をまとう身は、マーケティングのもと、脂質も身質も食感も、消費者になることを期待された人びとの好みにあうように計算されている。例えばブルーベリー味のガムが私たちの目に訴えるように、商品世界では味覚の視覚化が進み、コピーがオリジナルよりも鮮やかで人の欲望を刺激するよう調えられてきた（Hisano 2019）。サーモンの身の色もまた、天然のサケ・マス類の身の色を模倣を超えて創造され続けている。こうして、サーモンという商品カテゴリの中で、他と競合できる差異ある商品であるため、物質性、物語性、コストと値段、スケーラビリティ、均質性、効率性が、原材料の生命の形態、すなわちサケ・マス類の形態を決めることが当たり前になっているのだ。

だが、変容するサケ・マス類の形態や生活史が消費者に見えることはあまりない。養殖の魚たちが姿形のままショーケースに並ぶことは少なく、せいぜい販促用のポスターに現れる程度だ。日本社会では、養殖で育てられた魚たちの中でも、アユやタイなど、丸のまま塩焼きや干物になるものたちはいるが、それでも、天然ものと養殖ものを一発で見分けられる人はよほど魚が好きな人だし、一尾まるごとのいわゆる丸魚が食卓にあ

がる機会も減ってきている。スライスされて整えられた切り身が必要とする視角化の要素と、丸のままの魚が必要とする視覚化の要素は異なる。現在において圧倒的に質量として競われているのは、切り身が表現する、視角化された味覚だ。

ここに逆転が生じる。どのような生きもののかたちであっても、そこから切り出された切り身が美しければ、商品としてはむしろその方が魅力的だ。生きもののかたちは問われなくなるのだ。そして「サーモン」というカテゴリが商品説明の全面に出ることになり、そのなかに収められたリアルな魚たちの生き様や姿形が見えなくても、新鮮さやおいしさは、「サーモン」というテキストと、視覚化された味覚である切り身のイメージをメディアに、消費者に伝わり、消費されていく。

こうして調べられた切り身たちは、ある権力と権威の特定のかたちを表現する人工物 (Winner 1980 : 121) でもある。ヴァンダナ・シヴァは、食の生産と流通、そして種子、水、肥料、土地といった基盤となる資源に対する支配が、一部の大企業や権力機構によって独占・管理されることを批判し、食の全体主義 (food totalitarianism) と呼んだ (Shiva 2000)。サーモンの種苗生産も植物の種子と同様、選抜と遺伝子編集により私企業により囲い込まれ、配合飼料と共に生産活動のあり方と形を均している。大規模な養殖サーモン生産が行われている場所では、サーモンシラミなど寄生虫の増加、抗生物質の効かない病原菌の出現、移入されて周囲の在来種にも広がる新種の病気等の問題が発生しており、在来種のサケ・マス類および生態系にも影響がある (ex. Krkosek et al., 2024)。切り身となったサーモンは、生産される周囲の生態系ごと、権力と権威のかたちを表現する人工系へと変えていく。

気候変動、持続可能性、動物倫理への配慮、抗生物質などの食の安全性を背景に、サーモン養殖は大きく批判され、その解決の一端として現代のフードテックは細胞培養により生きもののかたちを手放したサーモンの肉をつくることを目指している。細胞農業 (cellular farming) と呼ばれる培養肉生産の試みは鶏肉や牛肉を筆頭に広がり (福永 2022)、筋肉と脂肪の生産が進みつつある。シンガポール、米国、イスラエルでは商品として市場に並ぶ許可も出され、一部は実際に小売りやレストランで提供され始めた⁽²⁾。イギリスではペットフード用に細胞培養肉の使用が許可されている。サーモンは魚類の中でいち早く細胞農業での生産が目指され、米国の培養シーフード企業 Wildtype は培養サーモン肉の試食にたどり着いている。他にもウナギやエビなど培養シーフード開発は広がりつつある。生きものとして生まれることなく、その細胞を新しい家畜化の対象とする技術開発への投資も着実に伸びつつある。

培養シーフードもまた、切り身が表現する視覚化された味覚を競い合う。Wildtype

が表現するのは寿司グレード、和食で刺身として提供されるサーモン肉の美しさであり、食欲をそそる見た目だ。サーモン肉となるサーモンの細胞たちは、視覚化された味覚を表現できるように整えられ、塊となる。細胞を提供し、その源としてのイメージとして消費されることが、オリジナルである生きものの役目となる。

(2) モノ化する生命たち

生きものであることすら解体されていく現在の家畜化を、私たちはどのように価値づけ、どのような判断基準のもとで理解していけばよいのか。批判的動物論において中心的論客である社会学者リチャード・トワインは、文化人類学者バーバラ・ノスケがつくった「動物産業複合体 (animal-industrial complex)」(Noske 1989) という概念を応用し、監獄産業複合体、エンターテインメント産業複合体、医薬産業複合体との連動性を論じながら、動物産業複合体のネットワークと複合性の分析は、権力と権威を占有する経済・文化の形態について、交差的で批判的な知識を生み出す重要な第一歩と位置づける (Twine 2012)。生命科学と資本主義が結合し加速するバイオ資本主義 (Sunder Rajan 2006) は、生命を遺伝子や化学式へ情報化・断片化しながら、科学的知識や技術の生産を資本として運動し続ける。動物産業複合体への着目は、こうしたバイオ資本主義のメカニズムにおいて、家畜化のための化学的知識や技術の生産が重要な資本となっていることを指し示す。

サーモンもまた、動物産業複合体を形成している。サーモンがいかなる家畜化を経験しているのか、その動力の運動がよくみえるよう現実には補助線を引くならば、「生殖労働 (regenerative labor)」(Waldby and Cooper 2010) という補助線がふさわしいだろう。この補助線は、批判理論としてのフェミニズム研究と動物論の交差から明確に現れるものだ。女性の性や身体をめぐる議論が進められてきたモノ化と雌性の拡張が、この補助線を構成する。

まずは、家畜化という営みを支えてきた、モノ化という概念について議論することから、補助線の形成を試みてみよう。モノ化とは文字通り、ある存在を道具的存在に変えることだ。あるものの存在を人間よりも引き下げ、支配や操作が可能な道具的存在にする。そのものの能動性、自律性、代替不可能性、主観を否定し、そのものを所有し、好きに扱って壊すことも、置き換えることも可能だとみなす⁽³⁾。

家畜化される生命は、生殖もさることながら、なによりも死を統制される存在だ。工場式畜産の中では、動物たちは死に近づく時期をいかに短くするかが競われる。サーモンも同様だ。給餌の時期を短くすればコストは安い。病気や嵐などのリスクもそれだけ

減らせる。効率的で生産性の高い肉のつくりかたは、いかに生の時期を効率よく短くし、死の統制をタイミング良く行うかということにかかっている。こうした死の統制は、対象をモノ化しているからこそ可能となる。しかし、モノ化と死の統制が結合し、家畜産業を支えていることは私たちからは見えない。政治学者のティモシー・パチラットが牛肉生産の場のフィールドワークから「視界の政治」と名付けたものがそこには働いている。見えないようにすることで、生産に関わるものたちや私たちと動物たちの情感の流れを遮断し、倫理的な問いを私たちが抱かないよう、監視と隔離のシステムが働く (Pachirat 2011)。

「肉を食べる背後には、不在がある」(Adams 1990:13)。そう述べたフェミニストのキャロル・アダムズは、肉と肉食が性的偏見・暴行、ジェンダー役割・規範・差別などの文化的再生産に果たす役割を追いかけ、「不在の参照者 (absent referents)」(Adams 1990:20) を生む表象の政治⁽⁴⁾が、モノ化した動物たちをさらに見えなくさせ、モノ化の度合いを高めると同時に、他の集団への抑圧も高め合う構造を生むのだと指摘する。「不在の参照者」とは、意味の構築に大きな役割を果たしながらも、その言葉の指す中に含まれないものたちのことだ。サーモンという商品に肉を提供するギンザケは、モノ化され、死を統制されつつも、そのような生を送る存在として消費者の前に現れることはない。存在は文字通りサーモンという商品から消されてしまう。それは、「視界の政治」で言えば、そもそも視界に入る候補としてすらあがることができなくなるということだ。

(3) 拡張される雌性

2023 年 11 月、静岡に養殖サーモンの取材に出かけた折、その養魚場で働き始めたばかりだという 20 代の男性 A さんと話をした。養殖業界に入ったばかりだという彼は、働き始めて驚いたことを、作業の合間に屈託なく話してくれた。魚を育てるという過程を担当するようになって、「相手は生きものなのだ」ということに目を開かれたという。

いや、あたり前なんですけど、改めて、ああそうか、餌を毎日食べるんだ、世話しないと死んじゃうんだ、っていう。変な話ですけど、なんだか⁽⁵⁾。

生きものを育てるのはずっと好きだった、という彼だったが、肉をつくるということと生きものを飼うということが結びついていなかった自分に驚いたという。養殖場で働き始めてから、複数の種類の違うニジマスの改良品種たちが、自分の視界の中にそのような生きものとして現れたのだ。北米原産のニジマスはトラウトサーモンとも呼ばれ、ご当地あわいものから見る世界

サーモンのブランド化を支える魚種であり、日本では明治期に移入されてから、各地で継代されて、家魚化されてきた魚だ。サーモンという商品を構成するグローバルな代表種でもある。

ここの池は普通の魚なんですけれども、向こうの池はゼンシサンバイタイです。あ、この言葉あんまりメジャーじゃないというか、ぜんぜんメジャーじゃないですけど、あの、全部、雌で、3倍体だっていう。結構、開発に時間がかかったみたいですけど、美味しい魚です。間違いない。

ゼンシサンバイタイという音を聞いても、普通の人には全雌3倍体という漢字も思いつかないし、何のことかわからないだろう、自分も最初は呪文のようだった。はにかみながら、そう説明してくれた彼の言葉は、美味しい魚です、というところはとても力強かった。

全雌3倍体とは、性成熟に至らないという不妊性を与えられた雌のみで構成される、という意味だ。家畜にとって性成熟は死と同様に統制の対象である。繁殖のためではなく、生み出される肉の身質に直結するからだ。性成熟をむかえて卵や精子をつくり出すということは、それだけエネルギーを必要とするから、身に蓄積された脂肪はそちらに使われる。天然のもので回遊する魚種であれば、どこのタイミングで群れを捕まえるかによって身質が変わる。私たちが慣れ親しんでいる「旬」は、漁獲が可能な時期を指すが、同時にその魚がどのタイミングで食べられることが好まれるのか——ハタハタのように卵ごと抱えた状態が良いのか、サンマのように産卵前の脂のりの良さが求められるのか——によっても異なる。天然のものは魚類の生活史と環境によって身質の状態も違うから、それを漁獲時期のみならず、調理加工の仕方でも工夫をするという人間側のスキルと力量が必要になる。こうしたばらつきがなく、均質化された商品をつくるためには、何より生殖と性成熟の統制が必要なのだ。

3倍体はもともと自然界にも存在するし、3倍体を利用した栽培技術は植物だとバナナなどにも広く見られる。種なしスイカもそうだ。通常、細胞のなかには染色体は2セット入っており、父母からそれぞれ1セットずつ引き継ぐ。この状態が2倍体である。このセットが3セットのものを3倍体、4セットのものを4倍体と呼ぶ。不妊性をもつのは3倍体で、精子や卵など配偶子をつくる過程で減数分裂ができず、配偶子がつくれない。しかし、身体の成長に問題はないから、魚の場合、性成熟をしない美味しい身質の魚がつくれる。

3倍体のつくりかたは2通りある。受精卵の初期、染色体が分裂・増殖する時期に水

圧や温度など物理的刺激を与えると、3 倍体ないし 4 倍体を生み出すことができる。ただしこの技術はなかなか困難で、受精卵の発眼率が安定しないという難点もあった。この場合、できた種苗は雄と雌が群れに交ざっていることになる。3 倍体雌は二次性徴が現れないが、3 倍体雄は二次性徴が現れ、生残率に影響することから、3 倍体雌だけの群れにすることがのぞましい（沢木ほか 2005）。

すべてを雌にするには、性転換させた雄を使った別の方法が必要となる。もともと雌に育つ 2 倍体の受精卵（XX）の性決定分化期に、雄性ホルモン投与や水温、密度などの環境条件を整えると、卵原細胞が精原細胞に転化し、遺伝子は XX のままの雄となる（cf. Yoshizaki et al., 2010）。そうして作出した偽雄を 4 倍体の雌にかけあわせると、その群れはすべて 3 倍体の雌となる（藤本・西村 2021）。この群れの中からさらに一部雌に対して同様に性転換処理を行うことで、全雌集団のまま次の世代を育てることもできる。

こうしてつくられ、育てられていたのが、A さんがいう全雌 3 倍体の池の魚たちだ。このニジマスたちは二次性徴をしないまま、身の色や脂のりを決める配合飼料を食べて育ち、サーモンとして出荷される。消費者の好む味をデザインし、安定的に提供するための雌性の拡大の姿がここにある。

こうした家畜化における雌性の拡大は、「生むこと」そのものに広がっている。代理親魚技法は別の魚の腹を借りて、つくりたい魚を増やす技術だ。ドナー種の卵や精子の元となる生殖幹細胞を、代理親となる近縁種の稚魚に移植する。代理親は成長するとドナー種の次世代を生む。絶滅危惧種を近縁種の力を借りて増やすこともできるが、卵を一度産めば死んでしまうキングサーモンの卵を、何度も産卵できるニジマスに生ませることもできる（Yoshizaki 2024）。

（4）「生殖労働」から捉える世界

フェミニスト科学技術社会論のキャサリン・ウォルビーとメリンダ・クーパーは、幹細胞研究によって生み出され、バイオ資本主義のなかで成立している、生殖に従事する新しい労働のかたちを「生殖労働（regenerative labor）」と呼ぶ（Waldby & Cooper 2010）。幹細胞産業は、孕むもの（雌性）＝母体＝ケアリング主体という直線的理解を分解し、科学技術による生殖実践の解体と再編成のなかで、卵であれ母胎であれ、雌性という機能の拡大とともにそこに従事する新しい労働と労働の担い手を生んでいる。このことは、雌性の拡大を他者に委ね、労働を受け取る側にとっては解放なのかもしれない（cf. サイボーグ化による二元論的ジェンダーや性からの解放）。他方で、その自由の

背後で労働するものたちになる／変えられていくのは、いったい誰であり、何なのか。

養殖技術だけでなく、細胞や微生物、生命現象そのものを家畜化していくフードテックも、「生殖労働」とともにある。特に、培養肉産業の技術はもともと医薬科学の再生医療技術をもとにしている。皮膚や筋肉の再生、代替臓器や脳をつくるオルガノイド研究はフードテックと地続きなのだ。ポストヒューマン的現実と、自然以後の自然という現実も入り交じる。

補助線としての「生殖労働」が提示するのは、私たちが創り出した性関係と生殖という営みが、自然と呼ばれてきた物質的な世界と、私たちのその世界に対する認識、経験、構成をどのように変えているのか、という視線の向け方だ。生殖というサービス労働と新しい生殖をめぐる階層性を基板として生まれくる世界を捉えるために、この補助線が果たす役割は大きいのではないだろうか。

3 「あわいもの」から見る世界

生命がインフラ化する世界で、私たちはどこに倫理的な線を引くべきなのだろうか。「生殖労働」という補助線は、二元論的な生命・自然観がもはや幻想でも成り立ちえなくなった世界で生きる私たちにとって、この問いを考えるための一つの枠組みを示してくれる。

文学者のティモシー・モートンは、気候変動を引き起こす人間活動の拡大がもたらした、私たちが生きる自然以後の生態系を、クシア・エコロジーと称する。人間が寄りかかってきた自然なるものの概念が通用しないクシア・エコロジーを生きる上では、二元論や、際だって存在し重視されてきた科学的・文化的な境界を乗り越える生命観（生命は「相互関係の網目」であり、種、生物と非生物、人間と非人間、さらには生物とその環境といった境界は曖昧なものである）が必要であり、新しい自然観を模索するためにも、さまざまなスケールの生命・非生命の関係性を捉え直し、もっとニュアンスに溢れて複雑な関係性そのものに着目することが肝要となる（Morton 2010）。私たちが創り出した性関係・新たな生殖の形態から——それが生殖という概念そのものを更新しなければならぬものであることも含めて——現実を読み解く支えとなるだろう（Mortimer-Sandilands and Erickson eds. 2010）。

さて、訪れた養殖場で A さんから一通り話を聞いて、私がニジマスたちの泳ぐ池を見渡していた時のことだ。バケツを持って水路の方に歩いて行った A さんが戻ってきた。池に繋がる水路は河川から引いているのだが、こまめに掃除しないと落ち葉が詰まる。折しも風の強い日で、歩いて説明を聞いているときにも、朝に掃除をしたという水路にはたくさんの落ち葉や枯れ枝が流れ着いていた。

ふと、Aさんがこちらを向き、話そうかどうか、という顔をしたので近寄っていくと、なんだか声をひそめてこう言った。

「ゼンシサンバイタイなんですけど、雄になるのがいるんですよ。そうすると、まわりも雄になるとか。俺はまだ、そういうところに出会ってないんだけど、それってなんか、すごいですよね。」

すごいっていうところ、もうちょっと詳しく、と聞くと、Aさんは目をパチパチさせた。

「いや、なんというか、人間の側のあれを飛び越すというか。自然ってすごいなって。」

全雌3倍体のアマゴの群れから、雄に性転換した魚がでたケースについては報告を読んでいたし、実は他の養殖池でも噂レベルでも、雄が現れてしまったという話は実験レベルでもちょこちょこ聞く話だった。Aさんは、人為的に生み出され、生殖も死も統制された魚の中に、人間側では思う通りにならないもの、「自然」の発生をみている。

「生殖労働」の枠組みの中では、ノイズ、不具合、品質を乱すもの、と捉えられるこの「自然」とはいったいなんだろうか。モートンが言う、ニュアンスに溢れて複雑な関係性を捉えることは、この素直なAさんの驚きから生まれてくるのかもしれない。

人工でもあり、自然でもあり、うまく定義はできないもの。その「あわいもの」に焦点をあて、そこから世界を見る方法を私たちは必要としている。

【脚注】

- (1) 詳しくは『資本論第一巻』所収の「商品の物神的性格とその秘密」を参照のこと (Marx 1962 = 1969)。
- (2) イート・ジャストの培養肉部門 GOOD Meat が発売した「GOOD Meat3」がシンガポールで販売された。GOOD Meat は米国企業である。<https://www.goodmeat.co/>。
- (3) モノ化の議論については米国の哲学者マーサ・ヌスバウムの議論を参照 (Nussbaum 1995)。
- (4) アダムズによれば、例えば女豹と表現されて性的なポーズをとるとき、女性は支配し搾取しても良い対象として脱人間化されたあげく、その性も生も消費される肉片としてモノ化される。食らう男性はそのとき、肉食だと喩えられる。女性が女豹と喩えられるとき、動物は野生性や性的積極性を意味する記号でしかなくなり、動物そのものは消えている。そして動物は野蛮で人間より劣るもの、御しがたいものといった表象のもとそのような存在だと定義される。動物への抑圧が女性への抑圧に用いられ、女性への抑圧が動物への抑圧に用いられるというエコー・チェンバーがそこに生まれる。
- (5) 2023年11月10日、フィールドノートより。

【参考文献】

- Adams, Carol J., 1990, *The Sexual Politics of Meat: A Feminist-Vegetarian Critical Theory*, New York: Continuum (= 1994、鶴田静訳『肉食という性の政治学——フェミニズム・ベジタリアニズム批評』新宿書房)。
- Baudrillard, Jean, 1968, *Le System des Objets*, Paris: Gallimard (= 2008、宇波彰訳『物の体

- 系：記号の消費』法政大学出版局).
- Cowen, Debora, 2014, *The Deadly Life of Logistics: Mapping Violence in Global Trade*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Douglas, Mary, 2002, *Purity and Danger: An Analysis of Pollution and Taboo*, Routledge, originally published in 1966 from Routledge and Kegan Paul (= 2008, 塚本利明訳『汚穢と禁忌』ちくま学芸文庫).
- Douglas, Mary and Baron, Isherwood, 2001. *The World of goods, towards an anthropology of consumption*. New York: Basic Books, originally published in 1979 from Allen Lane.
- 福永真弓, 2022「培養肉的生と付き合う」『現代思想』50 (7) : 81-93.
- 藤本貴史、西村俊哉, 2021「水産養殖における染色体操作技術とゲノム操作技術の利用と展望」『日本食品科学工学会誌』68 : 277-289.
- Haraway, Donna, 2015, "Anthropocene, Capitalocene, Plantationocene, Chthulucene: Making Kin." *Environmental Humanities* 6 (1) : 159-165.
- Haraway, Donna, and Anna Tsing, 2019, "Reflections on the Plantationocene: A Conversation with Donna Haraway and Anna Tsing." By Gregg Mitman. *Edge Effects*, June 18. <https://edgeeffects.net/haraway-tsing-plantationocene/>.
- Hisano, Ai, 2019. *Visualizing Taste: How Business Changed the Look of What You Eat*. Harvard: Harvard University Press.
- 星河廣樹, 2024「サケマス類の育種と地域ブランド化」『海洋水産エンジニアリング』2024 年 3 月第 174 号 : 52-61.
- Krkosek, Martin et al., 2024. "Pathogens from salmon aquaculture in relation to conservation of wild Pacific salmon in Canada". *Science Advances*. 10, eadn 7118. DOI: 10.1126/sciadv.adn7118.
- Mann, Charles, 2011, *1493: Uncovering the New World Columbus Created*. New York: Alfred Knopf (=2013、布施由紀子訳『1493：世界を変えた大陸間の「交換」』NHK 出版、上下).
- Marx, Karl, 1962, *Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie, Erster Band* (Marx-Engels-Werke, Bd. 23). Berlin: Dietz Verlag (Original work published 1872-1875) (=1969, 向坂逸郎訳『資本論 第一巻』岩波文庫。向坂訳はフランス語版など複数の版を参照している).
- Miller, Daniel, 1987. *Material culture and mass consumption*. Oxford: Blackwell Publishers.
- Mol, Annemarie, 2021, *Eating in Theory*. Durham: Duke University Press.
- Mortimer-Sandilands, Catriona, and Bruce Erickson, 2010, *Queer Ecologies: Sex, Nature, Politics, Desire*. Indiana: Indiana University Press.
- Morton, Timothy, 2010. "Guest column: Queer ecology". *PMLA*, 125 (2), 273-282. <https://doi.org/10.1632/pmla.2010.125.2.273>.
- Noske, Barbara, 1989, *Human and Other Animals: Beyond the Boundaries of Anthropology*, London: Pluto Press.
- Nussbaum, Martha C, 1995, "Objectification." *Philosophy & Public Affairs*, 24 (4) : 249-291.
- Pachirat, Timothy, 2011. *Every Twelve Seconds: Industrialized Slaughter and the Politics of Sight*. New Haven, CT: Yale University Press (= 2022, 小坂恵理訳『暴力のエスノグラフィー：産業化された屠殺と視界の政治』明石書店).
- Sassen, Saskia, 2014, *Expulsions: Brutality and Complexity in the Global Economy*. Cambridge: Harvard University Press.
- 沢本良宏ほか, 2005, 「ニジマス四倍体との交雑による異質三倍体の作出」『長野県水産試験場事業

- 報告』No.7 ; 1-9.
- Shiva, Vandana, 2000, *Stolen harvest: The hijacking of the global food supply*. Cambridge, MA: South End Press.
- Simmel, Georg, 1910, “Soziologie der Mahlzeit,” *Der Zeitgeist, Beiblatt zum Berliner Tageblatt* Nr. 41 vom 10 Oktober 1910 (Festnummer zum hundertjährigen Jubiläum der Berliner Universität), S. 1-2, Berlin (居安正訳, 2004, 「食事の社会学」『社会学の根本問題(個人と社会)』世界思想社, 155-67).
- Sunder Rajan, Kaushik, 2006, *Biocapital: The Constitution of Postgenomic Life*. Durham, NC: Duke University Press.
- Taylor, Sunaura, 2017, *Beasts of Burden: Animal and Disability Liberation*. New York: The New Press. (= 2020, 今津友梨訳『荷を引く獣たち: 動物の解放と障害者の解放』洛北出版)
- Twine, Richard, 2012, “Revealing the ‘animal-industrial complex—A concept and method for critical animal studies.” *Journal for Critical Animal Studies*, 10 (1), 12-39.
- Yoshizaki Goro et al., 2010, “Sexual plasticity of ovarian germ cells in rainbow trout.” *Development*. 2010 Apr;137 (8) :1227-30. doi: 10.1242/dev.044982. Epub 2010 Mar 10. Erratum in: *Development*. 2010 May; 137 (9) :1584. PMID: 20223765.
- 吉崎悟朗, 2015「代理親魚技法の構築とその応用に関する研究」『日本水産学会誌』81 (3) :383-388.
- Yoshizaki, Goro et al., 2014, “Gametes of semelparous salmon are repeatedly produced by surrogate rainbow trout.” *Science Advanced*, 10, eadm 8713. DOI: 10. 1126/sciadv. adm 8713.
- Waldby, Catherine and Melinda Cooper, 2010, “From reproductive work to regenerative labour: The female body and the stem cell industries.” *Feminist Theory*, 11 (1), 3-22. <https://doi.org/10.1177/1464700109355210>.
- Winner, Langdon, 1980, “Do Artifacts Have Politics?” *Daedalus*, 109 (1), 121-36.